
気まぐれ王

obey

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

気まぐれ王

【Nコード】

N16930

【作者名】

obey

【あらすじ】

少年は一人部屋の中で目を覚ます

何も知らず、着るものもない彼にあるのは圧倒的な戦闘能力のみ。

これはそんな彼が気まぐれに冒険する話。

初投稿です。

プロローグ（前書き）

初投稿です。

非才ながら頑張りたいと思います。

プロローグ

人里離れ木々が生い茂る森の中。

そこには灰色の小さな建物が存在する。

真つ黒な車が一台森を走っている。舗装されていないタイヤによって慣らされた荒れた道を走っているその車は、一直線に建物を目指す。

目的地に車を止めたその人物は乗ってきた車とは対象的に、サングラス以外は全て白い。上下とも服は白く、靴も白い。当然のように肌も白。白い髪は疲弊し切ったかのようにくたびれてしまっている。車を降りたその男はおぼつかない足取りで灰色のちいさな建物へと消えた。顔に不気味な笑みを張り付かせて…

その部屋には少年がいた。薄暗く壁面はボウツと光る模様が走る部屋の中で。液体で満たされた透明なケースの中、胎内の赤ん坊のように、身を丸めた少年の持つ暗い赤色の髪はゆらゆらと漂い、目は閉じられ、生存を示す口につながれた管は気泡が行き来している。そこに白い男が現れる。懐から赤いビー玉のような物を取り出しながらケースに歩み寄る。

「ふふふ、ついにこいつは完成する。この時をどれほど待ち望んだ

ことか。」

不気味に笑うとビー玉のような物を掲げ、何かをつぶやく。するとビー玉は赤い光を放ち始める。その現象に喜びをあらわにした白い男。

光は徐々に目も開けていられないほどのものとなる。白い男は目を腕でかばい光に対抗する。

部屋を赤が埋め尽くし程なくひいて行く。そこには先ほどと何も変わらない部屋があった。

「バ、バカな？わたしは何も間違えていないはずだ！」

そう叫んだ白い男は、何か考えたそぶりを見せると、急ぎ踵を返して部屋を飛び出していった。

動き出した少年に気付くことなく……

白い男が戻ってきたのは二日後

灰色の小さな建物は影も形もなく消え去っていた。

一話 目覚め(前書き)

主人公視点です。

一話 目覚め

く???.???

俺様は王である。名はまだない。

長い眠りについていたような感覚がする。体は動かないしそれどころか目を開くことさえできない

(まだ何もできない)

そう理解すると同時に、意識をなくした。

次に目を覚ますと体の調子がほんの少し良くなったようで、思考する猶予をあたえられた。

(俺は王になるべくして生まれた。ああ、何かそんな気がする。)

そんなことを何度か繰り返していると、周りに目を向けることが出来るようになった。

(相変わらず目は見えないが。フハハ 王に出来ぬことなどないわ。)

物腰から男である。

目の前に立っているのがわかった。邪魔とっとうせろなどと思っ
ていると

「フッフッフッフ」

突然笑い出した。

！！！！

嫌悪感が体中を駆け巡る。

(キモっ！ヤメロキモイトットハナレロ)

半狂乱モードに移行した俺の意識はすぐさま闇にすんだ。

俺の体を構成する全ての物質が喜びに震えているのを感じる。

突然体の奥底から湧き出てくる力。今までの体の状態が一変し、
歓喜に震える。溢れ出ようとする力を押しとどめ、落ち着いたこと
ろで、簡単に開いた目に移るのは黒いサングラス以外が真っ白な男。
どうやら考え事をしているようでこちらには気づいていないようだ。

(なんだこいつは……)

疑問に思ったところで、白い男は踵を返して出て行くところだ
った。特に呼び止める理由もないので放置。現状把握に務めること
にする。

どうやら俺がいるのは、薄暗く気味の悪い研究室のような部屋だった。窓などは無く扉すら無いことに疑問を感じるがひとまず置いておく。それよりも

(さてどうしたものか)

この気味が悪くなる部屋から抜け出したいがあいにくと窓も扉もない。

「しかたない」

久々に声を出したような感覚に違和感を覚えるが、そんなことは後回し。

”魔法”と呼ばれる現象を引き起こすための力”魔力”を己が身から汲み上げ、数多い過程をすつとばし純粋な破壊の意味を与える。

「これぐらいで十分か」

手の内には膨大な魔力がのたうち回っていた。

破壊の意味を与えられたそれは赤黒く、部屋の壁など薄紙同然に貫くだろうと感じられる。

「いけ」

何の躊躇もなく上方に放たれたそれは天井を轟音と共に吹き飛ばし、威力が衰えないまま空に浮かぶ雲に風穴を開けた。その災厄をもたらした当人は

(やりすぎた)

内心ヒヤヒヤであった

二話 行動開始（前書き）

編集させていただきました。

二話 行動開始

脱出に成功した俺は、妙な解放感を味わっていた。

「ムウ」

どうも今の俺は全裸。 あいにくとそのような露出癖はないので魔力でうごきやすい衣服を編む。

少々魔力を込めすぎた感が否めないが当面の問題にはなりそうもないので放置。

どうやら山の中に俺はいるようだ。 見渡す限りは全て緑、人の気配もない。 霧が多く所々に斜面があり登山には適していない。 こんなところに好き好んでくるやつは、よほど切羽詰まった状況でなければただの馬鹿しかいないだろう。

とりあえず人がいるところに行こうと考え、数多ある木の中から太く頑丈で遠くまで見渡せる一本を選びだし木登りの要領で駆け上がる。そして、身体能力を底上げする魔法の中では比較的難易度が低い視力の強化を行い、街を探す。

「ほう、そこまでの規模はないが活気はありそうだ。 まずはあそこに行くか。」

山の麓までとはいかないが、それなりに近いところに街があった。

先程の空への一撃のせいで民衆はあわてふためいているが、商人とおぼしき荷馬車を操っているものたちが目につく。

（まずはこの世界を知るのが必須条件。俺はあの部屋にいた頃より前のことを知らない。知人もいないのならばこの俺自らが世界を見る必要がある。そのついでにも信頼に足るものを臣下に据えねばなるまい。）

身体強化を施した足で山を降りながらそんな事を考えていた。

思ったより距離があつたようで街が近くなつてきた時には日が暮れかけていた。先程の砲撃を警戒して見知らぬ旅人が疑われることもあるかと思い、認識をズラしそこに誰も存在しないかのように偽装する高等魔法、認識阻害を軽くした物をかけ、目立たないようにして街に入る。

看板をみるにどうやらこの街はストウールズという街で、大陸の中央に位置するタワーリアという国に属しているらしい。戦争が近いらしく、これを気に稼ごうとしている商人が躍起になって商品を宣伝している。

歩いていると広場らしきところになる。

見事な噴水があるそこにはちょっとした人ばかりができていた。興味が沸き近づいて見るに、どうやら大柄の上半身裸の男があいにくと背中しか見えないが、黒いローブをまといフードを目深までかぶった160ほどの少年に凄み、男のうしろにいる見劣りはするがこれまた大柄の男3人がそれを囃し立てている。

「オイガキ！このギリアム様にぶつかっておいて、頭下げただけで通り過ぎようたアどーいう了見だ！」

と大柄の男、もといギリアムが叫ぶと

「そうだそうだ！」

「ギリアムさんに失礼だぞ！ちゃんと誠意を見せてみる！」

「黙ってねえでなんか言えよ、コラ！！！」

後ろの男たちが喚き出す。この街では偉いのだろう。人だかりの何人かは何か言いたそうにしているが目を背けて踵を返す。

その圧倒的不利な状況の中で、少年は

「申し訳ございませんでした。」

と、一言。

完璧な謝罪、どんな無知無学であろうがそう理解せざるを得ないそれを披露した少年訪れた沈黙のなかで、はあとに残すものを気にも止めず立ち去ろうとする。その場にいるもの全てが呆然とし、人

垣は分かたれ、悠然、なにより堂々と、その空いてできた道を進む。

「―――お、おい待てよ!!」

理解はできても納得はしないとばかりに自室状態からいち早く脱出したギリアムの一声で周りの人間もハツとする。少年は立ち止まるが、それも一瞬のこと。構わずに動き出す。

それを侮辱と感じたギリアムは目に見えて怒り、腰に下げている袋の中から大型のナイフを取り出す。

出てきた凶器に場の空気が一気に冷え切るが、気にもとめた様子もない彼は振りかぶって投擲。訪れる結末を予想しその場のものが一斉に目をつむり耳を手で覆う。

「なんのつもりです?」

驚いた彼等が目にしたのは、人さし指と中指を揃えて立てた状態でナイフをはさむフードを取っ払った少女であった。

三話 決意（前書き）

結構編集しました。

三話 決意

日も沈み、灯りだした街灯が広場の噴水を幻想的に照らしだす。そんななか、フードを取り払った見た目少女が、相対する、ギリアムを含めた3人の男たちを金の目を持って見据える。圧倒的な威圧感を放つその少女に対して本能的な恐怖を抱いたのか後ずさるギリアムたち。だが、

「う……………うおらああアア！！！」

抱いたものをなかつたことにするように雄叫びをあげたかと思つと、もう1本のナイフを腰に構え突進する。

それに対して落ち着いたままの少女はローブから覗くそのたおやかな指を持ってナイフを構える。

キーン

金属同士がぶつかり合う音がすると同時にギリアムは後退、驚愕の表情を少女に向ける。

少女は変わらぬ無表情のまま、ナイフを放り捨てたかと思つと優雅なそぶりですすめの人さし指をもってギリアムを示す。

疑念を持ったギリアムをあざ笑うかのように、その瞬間、視認できない空気の壁が、正面からギリアムを吹き飛ばす。一緒にいた男諸共吹き飛ばすと地べたを転がり、危険を感じて下がって見物していたギャラリーのもとまで、5メートルほどようやく止まった。数秒呻くと気を失った

「い、今の突風は……？」

「魔法……なのか？」

「あいつ、魔法使いだったのか……！」

啞然としたギャラリーを完全に無視して少女は歩きさって行った。

【魔法使い】 身に宿したり、大気中に存在すると言われる魔力を使って不思議を巻き起こすもののことを総じてこう呼ぶ。（当然例外もいるが）

主人公 s i d e

俺はそれに目を見張った。

致命的なまでの体格でのハンデをナイフを扱う技量のみで覆したことに。

本来様々な過程が必要な魔法の発動を、言葉を発することもなく行ったその異常性に。

そして何よりその容貌に。

その少女は、丸太のような腕に対して小枝のような腕を持ってナイフで弾き返した。

その少女は、魔法使いの中でもほんの一握りのものにしかできないであろう詠唱破棄と呼ばれるそれを行ない、しかもその威力まで完璧にコントロールして見せた。

(そんなことはどうでもいい)

俺にとってそんなものはあってないようなものである。

見惚れた。

理知的な切れ長の金色の双眼。ローブの中にしまわれているようだが相当の長さだろう明るい水色の髪。あいにくとローブに包まれたその肢体は拝めないが、白魚のような肌。

(何よりもっ！)

ローブに穴を開けたのだろう外気に触れているソレ。

暗いせいなのだろうか？誰もつつこまない、人外の証のソレ。

立ち去る歩調に合わせてゆらゆら揺れるソレ。

(小悪魔シツポ！！)

全力で強化した目でそれを舐め回すかのように視姦する。寒いのだろうか、一瞬震えたが気にしない。血走った眼で見つめる。黒く細くスベスベそうで先端が三角形が丸まったような形をしている。

(ああ……なんということだ。この俺がここまで心を奪われるとは
今すぐに愛でたいめでたいめで鯛。
ハアハアハアハア……………)

(あれを俺のモノにしてみせる!!)

そう決意した俺は、重要なことに気がつく。

(……………俺、名前なんつったっけ?)

三話 決意（後書き）

ナマエドローシヨ一

4話 宿屋（前書き）

きゅーせつきん

なお、悪魔っこは今作のヒロインデス

4話 宿屋

（さて、どのような名前にするか……。ふむ、やはり、王の器たるこの俺にふさわしい名前ではなくてはならぬ。誰よりも、そう神よりも求められ愛され尊いものとされるこの俺にふさわしい名前、一日やそこらで決められたものではない……。か。）

先ほどの騒ぎも幾分収まった広場。

つい先ほどギリアムが目覚めて青い顔で帰って行ったところだ。ギヤラリーもずいぶん前に去っていった。

そんななか、未だに自分の名前もないことに気づいたその少年は、広場のちようど中心にある噴水を見つめながら思考にとっぷりと浸かっていた。

（いや、そのような名前を俺が考えるわけにはいかんだ。誰からも必要とされる名前を俺が考え、名乗ってしまえば、それは則ち俺が求める存在の名前となってしまう。俺が求める存在といえは、やはりあの悪魔っ子……。ハッ！

すばらしいことを思いついたわ。なぜすぐ考えが及ばなかった、簡単なことではないか。）

その考えに至った彼は、口を歪めに歪め、それはもう恐ろしい笑みを浮かべた。

(こんなところでたむろしている場合ではない！即刻行動にうつさねば！)

まだ街にいるだろう少女を想い、追跡の魔法を唱え、すぐさま広場を立ち去った。正確には転移した。

主人公視点

そして、俺は今くたびれた宿屋の前にいる。おそらく少女はここにて宿を取ったのだろう。
時は深夜。周りに人影はない　と考えるよりは、意図してここをえらんだのだろう。

昼頃の俺が起こした天災級の現象と、先ほどの騒ぎ。これを警戒したのか、鎧を身に纏った若者たちが大通りをパトロールしていた。
ここは大通りとは程遠い場所。そんな者たちの姿はない。こんなところにある宿屋なんて一般の客目当てではない事はわかりきっている。

傭兵などが情報を目的に訪れるような雰囲気でもないそこは、後ろ暗いもの、というよりはワケありな奴らにとっての数少ない安全

な地。

あの少女がワケありなどということくらい最初からわかり切っている。

この宿屋にいても何もおかしいところなどない。俺からすれば。

(……………さて、やはり最初の挨拶が肝心だ。いい印象を与えつつ、絶対的な安心感を持たせることが重要。……………俺に……………できるのか……………。

いや、やってみせる！失敗は許されん！…もとより王の器たるこの俺が失敗などしてたまる物か！)

決意を胸にし、立派な修飾が施されたドアを……………蹴り飛ばす！

店内に突っ込んで行き騒音を立てるドアは無視。

「頼もう！ここに黒いローブを身に纏い、しっぽを携えたものがあるだろう！？」

俺の元に連れてきてはくれまいか？」

声を張り上げた先にいるのはテーブルを拭いていた老人。

年に似合わず鍛え上げられたその肉体は怯えているように震えている。

「ああ、すまないなご老体。危害を与えるつもりはないのだが、

下手に隠そうものならどうなるか……わかるな？」

「…………… ロルフだ。…………… 今呼びに行くからそこに座つとね。」

ロルフと名乗った彼は、階段を上って行き、視界から消え失せた。

(…………… 完璧だ。さすが俺)

ロルフ s i d e

(あの少年、何者だ?)

これでも幾多の逆境を乗り越え、この宿屋の経営者に落ち着くまでに汚い仕事もやったし、格上の相手や、魔法使いとも戦ったことがある。それでもあの少年には勝てる気がしない。相手にすらならない。垂れ流している圧倒的なまでの魔力、それに加え立ち居振る舞い。人間ではないものとの面識もあるが、人間に圧倒的な力の差を見せつける彼らでも勝つことは叶わないに違いない。指一本たりとも触れられないだろう。

コンコン

「旅のお嬢さん。あなたに会いたいという方が。」

ノックすると同時に掛けた言葉に

「……………わかった」

緊張しているのがとってわかるような返答が返される。
おそらく一階にいる待ち人の異常性を感知したのだろう。

この宿に泊まりにくる者は立地条件的に『普通』とはかけ離れている。

『街の裏』、『最深部』と形容するに足る雰囲気を満たしたこのあたりは、路地裏に張って道ゆく人に襲いかかる様なチンピラや、そこらの傭兵とは程度が違う。『数の暴力』という言葉があるが、一部のものはそれがあてはまらない。一人で中規模の部隊と渡り合う者もいる。まさしく『化物』である。

この少女もうまく隠蔽できているが、こつちだって無駄に戦場を彷徨ってきたわけではない。いささか感が鈍ってはいるが、少女が保有している魔力が桁外れなことくらいは分かる。

(こちらも向こうも下手な干渉はしない。)

事前にそういう取り決めはあったが、物申したい事もある。

漸く部屋から出てきた少女は黒いローブを着込み、フードを被っているせいで肌は全くと言っていいほど晒されていない。それは別にここに泊まりに来る以上は素顔をさらされたくない身の上なのは分かる。だがしかし……………

(何故しっぱだけ出してゐるんだろっ?)

ロープからはみ出している、というよりは隠す気もないように外気に晒されたそれは、持ち主の緊張の度合いを示すかのように伸びきって震えていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1693o/>

気まぐれ王

2011年1月26日13時05分発行